

山へ歸りゆく父

小川未明

青空文庫

父親^{ちちおや}は、遠い街^{とおまち}に住^すんでいる息子^{むすこ}が、どんな暮^くらしをしているかと思^{おも}いました。そして、どうか一度^どいつてみたいものだと思^{おも}っていました。

しかし、年^{とし}を取^とると、なかなか知^しらぬところへ出^でかけるのはおつくうなものです。そして、自分^{じぶん}の長^{なが}らく住^すんでいたところがいちばんいいのであります。

「私^{わたし}は、こんな年^{とし}をとったのに、せがれはどんな暮^くらしをしているか心配^{しんぱい}でならない。今年^{ことし}こそはいつてみよう。」

父親^{ちちおや}は、遠い旅^{とおたび}をして、息子^{むすこ}の住^すんでいる街^{まち}にやってきました。それは、にぎやかな都会^{とかい}でありました。

静かな、夜などは、物音ひとつ聞こえず、まったくさびしい田舎に住んでいました人が、停車場に降りると、あたりが明るく、夜でも昼間のようであり、馬車や、電車や、自動車が、往来しているにぎやかな有り様を見て、びっくりするのは無理のないことです。父親も、やはりその一人でした。

「お父さん、よくおいでくださいました。」といって、息子はどんなに喜んで迎えたかしれません。

息子はいまでは、この都でなに不自由なく暮らしていられる身柄でありましたから、父親に、なんでも珍しそうなものを持ってきて、もてなしました。また、方々へ見物にもつれていたりいたしました。

父親^{ちちおや}は、はじめのうちは、どこへいつてもにぎやかなので驚^{おどろ}いていました。また、いままで口^{くち}にいれたことのないようなものを食^たべたりして、こうして、人間^{にんげん}が暮^くらしてゆかれたら、しあわせなものだとも考^{かん}えられたのでした。

五^{いつ}日^か、六^{むい}日^かというふう^{おな}に同じことがつづきますと、そのにぎやかさが、ただそうぞうしいものになり、また、毎^{まい}日^{にち}ごちそうを食^たべることも、これが人間^{にんげん}の幸福^{こうふく}であるとは、思^{おも}われなくなりました。

「お父^{とう}さん、おもしろい芝居^{しばい}が、はじまりましたから、いつてごらんになりませんか。」

「いいや、見^みたくない。」

「お父さん、これから、なにかうまいものを食べに出かけましよう。」

「いいや、なにも食べたくない。」

父親は、じつとして、家の中に、すわっていました。

「どうしたのですか？ お父さん。」と、息子も、父親が気乗りをしないので、心配して問うたのでありました。

「私は、国へ帰りたくなつた。」と、父親は答えました。
息子は、これを聞くと、目を円くして、

「あんなさびしい山の中へ帰つてもしかたがないではありませんか。どうして、あの不便なところがいいのですか？」と、息子は、

ちちおや　こころ
父親の心をはかりかねて、たずねました。

わたし
「私は、国へ帰りたい。」と、父親は答えました。

とう
「お父さん、なにかいけないところがあつたら、いつてください。
わたし
また私たちが、気のつかないところがあつたら、これから気をつ
けるようにしますから、もつと、こちらにいてくださいまし。そ
のうちに、お父さんは、この街の生活にも、おなれでありまし
ようから……。」と、息子^{むすこ}は、ひたすら真心^{まごころ}をあらわしてい
ました。

ちちおや　あたまふ
すると、父親は、頭を振つて、

わたし
「いや、私は、かえつておまえが国に帰るように、つれにきたの
だが、おまえは、帰らないか？」といいました。

「どうして、お父さん、私が、帰ることができましよう？」

息子は、父親の顔を見つめて、あきれた顔つきをしました。

それから、日ならずして、老人の故郷に向かつて旅立つてゆく、姿が見られたのであります。

その日は、一日、息子は、家にいて、父親のことを案じていました。

「あんなに、お年をとっていられるから、道中なにか変わつたことがなければいいが……。」

「いまごろ、汽車はどのあたりを通っているだろうか……。」
いろいろと息子は、思いました。そして、道すがらの景色などを思い出しては、目に描いていたのであります。

汽車は、高い山々のふもとを通りました。大きな河にかかつて
 いる鉄橋を渡りました。また、黒いこんもりとした林に添
 って走りました。白壁の土蔵があつたり、高い火の見やぐらの
 建つてゐる村をも過ぎました。そして、翌日の昼過ぎには、故
 郷に近い停車場に着くのでありました。

「いまごろは、お父さんは、あの街道の松並木の下を歩いて
 いなさるだらう……。」と、息子は、都にいて思つていました。

それは、広々とした、野中を通つてゐる、昔ながらの道筋
 でありました。年とつた松が道の両側に生い立っていました。
 野の面を見わたすと、だんだん北の海の方に伸びるに従つて、低
 くなつていきました。そして、その方の地平線は、夕暮れ方にな

つても、明るくありました。

山には、せみやひぐらしが鳴いていました。老人は、もう多

年この山の中に生活をしています。道すがらの木も、草も、石

も、またこの山にすんでいる小鳥や、せみや、ひぐらしにいたる

まで、毎日のように、この山道を歩く老人の咳ばらいや、

足音や、姿を知らぬものはありません。

父親が、街道を歩いていきますと、電信柱の付近に鳴い

ているつばめは、「いま、お帰りですか。」と、いうように聞こ

えました。

夕焼けの空は、昔も、今も、この赤い、悲しい色に変わりがあ

りません。父親は、夕焼けの空をながめました。

「よく、自分^{じぶん}は、せがれの手^てを引^ひいて、夕暮^{ゆうぐ}れ方^{がた}、町^{まち}から帰^{かえ}ったものだ。あの時分^{じぶん}のせがれは、どんなに無邪^{むじゃ}氣^きで、かわいらしかったか。あのせがれがいまでは、りっぱな人間^{にんげん}になったのだ。私^{わたし}が、こんなに年^{とし}をとったのも、無理^{むり}はない……。」「と、考^{かん}えにふけたのでした。

そして、老人^{ろうじん}は、いよいよ山道^{やまみち}にさしかかりますと、山^{やま}の上^{うへ}は、まだ、ふもとよりは、もっと明^{あか}るくて、ちようが飛^とんでいました。

「いま、おじいさんお帰^{かえ}りですか？」と、いつているように、人^{ひと}なつかしげに、老人^{ろうじん}の身^みのまわりを飛^とんでいました。せみも、ひぐらしも、このとき、みんな声^{こゑ}をそろえて鳴^なきたてました。

「よう帰かえつておいでなさいました。あなたのお山やまは、いつでも平へ和いわです。おじいさん、あなたは、いつまでもこのお山やまにおいでなさい。そして、けっして、ほかへゆくなどと思おもいなさいますな。」

おじいさんは、にこにこしていました。

「なんで、こんないいところを捨すてて、他国たこくへなどゆけるものか。」

いつまでも、いつまでも、この山やまの中なかの自分じぶんの家に、暮くらそうものと思おもいました。そして、その憐あわれげな、小ちいさな影かげを道みちの上うえに落おとしながら、一歩ぽ、一歩ぽ、登のぼってゆきました。

こうして、父親ちちおやは、また、故郷こきようの人ひととなったのであります。

こんどは、息子むすこが、毎日まいにちのように父親ちちおやの身みの上うえを心配しんぱいしました。

「お父さんとうは、ほんとうに年としをとられた。」と、彼はかれ父親ちちおやの姿すがたを目めに思い浮おもかうべました。自分じぶんが子供こどものとき、父親ちちおやの後あとからついて町まちへゆき、また山やまに帰かえつたときは、父親ちちおやは、まだ若わかく、力ちからが強く、達者たっしやであつたのです。そう考かんがえると、なぜ早はやく、この都みやこへ越こしてこれないものかと案あんじていました。

「あのさびしい、不便ふべんな、田舎いなかがなんでいいことがあるう。ぜひ、今年ことしの中に、迎むかえにいつてつれてこなければならぬ。」と、息子むすこは毎日まいにちのように思おもっていました。

それに、秋あきから、冬ふゆにかけて、山やまの中なかは、風かぜが寒さむく、吹雪ふぶきがす

さまじいのでありました。息子むすこは、故郷こきようにいた時分じぶんの記憶きおくをけつして、忘れるわすことができません。

「雪ゆきの積つもる冬ふゆは、お父さんとうは、どうしてあんなところで暮くらさ
れよう。」

息子むすこは、とうとうお父さんとうを、自分じぶんの住すんでいるにぎやかな街まち
へ迎むかえるために、久しぶりひさで故郷こきようへ帰かえったのであります。

息子むすこは、自分じぶんの生うまれた、古い家ふるいえの中なかへはいりました。すると、
いろいろの思おもい出でが、そのままよみがえってくるのでした。壁かべ

板いたに書かいた、子供こどもの時分じぶんの樂器がっきが、なおうすく残のこっています。

よく鳥とりかごをかけた、戸口とぐちの柱はしらの小刀こがたなの削り痕けずあともそのままであ
ります。雨あめの降ふる日ひには、土間どまで独樂こまをまわした。そして、よく、

かち当てた敷石もちやんとしていました。なにもかも、昔のま
まであつたのであります。

息子は、ぼんやりとした気持ちで、二、三日は過ごしてしま
いました。

「お父さんは、都へおいでになりませんか。」と、息子は、い
いました。

「いや、どうして、この長く住み慣れた家を、捨ててゆけよう。」
と、父親は、頭を振りました。

「おまえこそ、ここへ帰つてきて、いつしよに暮らしたがいい。」
と、父親は、息子に向かつていいました。

息子は、都に残してきた、仕事のことを思い出しました。そし

て、どうしても都に帰らなければなりませんでした。

二人は、たがいに別れて暮らさなければならぬのを悲しく思いました。

「これは、おまえが子供の時分に、裏の庭さきで拾って大事にしていた石だ。」と、父親はいつて、床の間の台の上に乗せてあった黒い石を取りあげて、息子に見せました。

「私は、おまえが子供の時分に、持っていたおもちゃは、みんな粗末にしないでしまっておく。そして、ときどき出してみては、

おまえのことを思い暮らすのだ。」と、父親はいいました。

これを聞くと、息子は、どんなに父親の情けをありがたく感じたかしれません。そして、その黒い石を、手に取ってつくづく

とながめますと、やはり、自分じぶんにも子供こどもの時分じぶんのことが思い出おもさ
れたのであります。

ほとんど、幾いく十年ねんの間あいだ、その石いしは、故郷こきようのうす暗ぐらい、家いえの床とこ
の間に、ほこりを浴あびて置おかれていました。

「お父とうさん、私わたしは、この石いしを持もつていつてもようございますか？」
と、息子むすこは、父親ちちおやにたずねました。

「ああ、いいとも、おまえの持もつてゆくぶんにはさしつかえない。
なんでもほしいものがあつたら持もつてゆくといい。」と、父親ちちおや
は答こたえました。

長ながい、長ながい間あいだ、こうして、じつとしていた石いしが、ここから、ど
こかへ、まったく知しらぬところへ持もつてゆかれることになりまし

た。それは思いもよらないことで、変化へんかというものがどんなものの上うえにもくることを、思おもわせたのであります。

石いしは、息子むすこのかばんの中なかへ、紙かみに包つつまれてはいりました。

彼かれは、また外そとに出て、子供こどもの時分じぶん、よく遊あそんだ草原くさはらへやつて

きました。そこには、いろいろな草くさが、紫むらさきや、青あおや、白しろの花はなを咲さ

かせていました。その花はなは、このあたりにはたくさんあつても、

都みやこではとても見みることができませんでした。彼かれは、その花はなの一つ、

一つを昔むかしのお友ともだちにでもあつたように、なつかしげにながめま

した。とんぼが飛とんできて、かがやかしい羽はねを、花はなに止とまって休やす

めています。それに、じつと見入みいっていると、そのころ、いつし

よに草くさの葉はや、花はなをつんで遊あそんだ近所きんじよの女おんなの子こや、男おとこの子この姿すがた

が、ありありと目さきにちらつくように映ってくるのでした。

しかし、その女の子も、男の子も、もういまではこの土地には

いません。みんな大人になって、女の子はお母さんになり、男の

子はお父さんになっているのです。けれど、この草原の景色は、

昔とすこしの変わりもありませんでした。草に咲いている花の色

も、またとんぼの羽もすこしの変わりがありませんでした。

息子は考えました。「この草も都へ持つてゆこう。そして、朝

晩ながめて、故郷のことを思い、子供の時分のことを考えよ

う……。」「と、彼は、紫色の花の咲いている草を、根をつけ

て掘り取ったのであります。

やがて息子は、都に帰ることになりました。父親に、別れな

ければならぬ悲しみで、胸いっぱいにして旅立ちました。

汽車は、くるときと同じ道を通つて、ついにふたたび故郷から遠く去つてしまつたのであります。

幾百里も、遠いところを石と草とが運ばれました。石や草はど

うして、こんな遠いところへくるなどと思つてましたでしょう？

息子は、植木屋に、草といつしよに石も鉢へ移させました。そ

して、草と石とを、ときどき見ようとしたのであります。植木屋

は、鉢の中へ、草を植え、程いいところへ石を置きました。

「これで根がつけば、たいしたものです。」と、植木屋はいま

した。

息子は、植木屋に向かつて、「これをどこに置いたらいいだろ

うか。」と聞ききました。

「さようです、寒さむいところに生はえる草くさですから、風かぜ当たりのいい、高たかいところがいおもいと思おもいます。」と、植木屋うえきやは答こたえました。

息子むすこは、これをバルコニーに出だしておきました。そこからは、都会とかいのいろいこうじようろな工場こうじようから上あがる煙けむりが黒くろくなつて見みられました。ちようど黒くろいへびのはい上あがるように、いつしか青あおい空そらに、煙けむりは吸すい込こまれて消きえているのでありました。

また、いろいちまたろの、巷おから起おとこる音きが聞こえてきました。風かぜは、いままでは、つねに南みなみから吹ふいていましたが、だんだん北きたから吹ふくほうが多おほくなると、季節きせつも変かわつて、熱あつさは去さつていったのです。

つばめは鳴いたり、すずめもまれにきて、屋根の上などで鳴きましたけれど、草は、故郷の草原で聞いたような、いい小鳥の声にはふたたび出ありませんでした。

太陽は、東から出て、西に沈みました。けれど、あの黒い森影から上がって、あの高い雲の光る山のかなたに沈むではありませんでした。いつもほこりっぽい建物の屋根から上がって、あちらの屋根の間に落ちるのです。草は、夜々、大空に輝く星の光を仰いで、独りさびしさに泣いたのです。故郷の露深い、虫の声のしげき草原が慕われたからです。そこにいまもお花の咲いている姉妹や友だちがいるのが、かぎりなく恋しかったのです。

ある日、草は、下に黙ってすわっていた石に向かつていいました。

「あなたも、遠くからきなされたのですか。」

「ええ、やはり汽車に乗って、あなたといっしょにまいりましたのです。」と、石は答えました。

すると、草はさも疲れたというようすをして、

「あなたは、体がおじょうぶですから、どこにいられてもいいのですけれども、わたしは、もうこんなに弱っています。ついここにくるまでは、はかない自分の運命というものに考えつかかかったのです。」と、さも後悔したように語りました。

これを聞くと、さすがに黙っていた石も、感慨に堪えないふ

うで、

「わたしは、長い幾十年かの間、無事に暮らしてきました。そして、おそらく、永久にそのように暮らされるものと思つていました。それが、思いがけなく、こんな身の上になつてしまったのです。これから先のことを考えると不安でなりません。」と、石はいいました。

やさしい草は、自分の身を忘れて、石に同情したらしかった。

「けれど、あなたはおじょうぶですから、安心なさいまし。わたしは、枯れれば、明日にもあの人通りの多い道の上に捨てられてしまふかもしれません。そうすれば、あの怖ろしい車や、馬

にふまれて、わたしの体は、からだ 跡形もなく砕かれてしまふでしょう。」「と、草はいいました。

「いえ、私だつて同じことです。」「と、石はいいました。こうして、草と石とが相慰め合つたのも、束の間のことではありません。草は、とうとう枯れてしまつたのです。

息子は、草の枯れたのを、どんなに悲しんだかしれませんが。

「そのうちに、なにか、かわりのいい草を見つけてきて植えてさしあげます。」「と、植木屋はいいました。

ある日のこと、植木屋は、バルコニーに上がりました。そして、枯れた草の鉢を持って降りてきました。なにか、それに代わりの草を植えようと思つたからです。

その後のことでありました。息子むすこは、夜床よるこの中なかにはいつてから、枯かれた草くさや、持もつてきた石いしのことを思おもい出だしました。せめてあの石いしなりと大事だいじにして、記念きねんにしておこうと思おもいました。そして、夜よの明あけるのを待まつてバルコニーに出でてみますと、いつのまにか、そこには新あたらしい草くさの植うわつた鉢はちが置おいてありました。そして、もとより枯かれた草くさも、石いしも影かげだに見みられませんでした。

「この草くさは、どうしたのだ？」といつて、家内かないのものに聞ききますと、

「昨日きのう、植木屋うえきやが、あなたのお留守るすに持もつてきましたのです。」と答こたえました。

息子むすこは、枯かれた草くさはしかたがないとしても、石いしは、どこへいっ

たろう。植木屋うえきやに聞いてみよう、さつそく、植木屋うえきやを呼びにやりました。

「あの、草くさの下したにあつた、黒い石くろいしでございますか。つまらない石いしだと思つて、捨ててしまひました。」と、植木屋うえきやは答えました。

息子むすこは、これを聞きくといひそう驚おどろきました。

「あの石いしは、私わたしの大事だいじな石いしだ。どこへ捨ててしまつた？」と問といました。

すると、植木屋うえきやは、しばらく考かんえていました、

「たしか、ここからの帰かえり途みちに、あちらの広ひろい空地あちに捨ててしまひました。」と答こたえたのであります。

その空地あちは、もと建たて物ものがあつたのですが、いまはなににもな

く草くさが茫々ぼうぼうとして生はえていました。そして、子供こどもらはその中なかに遊あそび、通行つうこうする人ひとたちは、近道ちかみちするために、その空あき地ちを横よこぎったのであります。

息子むすこは、どんなに、がっかりしたかしれません。どうしても、その石いしを忘わすれることができませんでした。すると、黒くろい石いしが、夜よ露つゆにしつとりと湿ぬれて、広場ひろばの中なかで、月つきの光ひかりに照てらされて輝かがやいている夢ゆめを見みました。

ふと目めをさましますと、外そとは、ちやうどその夢ゆめに見みたようない月夜つきよで、小ちいさな窓まどが明あかるく月げつ光こうに照てらされていました。彼かれは、さつそく、起おき上あがりました。そして、その広場ひろばへ、石いしが落おちていないかと探さがしにゆきました。

すつかり秋の景色あき けしきとなつて、こおろぎが鳴ないていました。うすもやが一面めん おに降りて、建物たてものの間や、林はやしの木の間や、広場ひろばの上うへに渦巻うずまいていようにも見みられました。

息子むすこは、あたりが、すでに眠静ねしずまつた真夜中まよなかごろ、一人広場ひとりひろばにやつてきますと、はたしてさびしい月の光つきひかりが、草くさの葉はをば照てらしていました。

けれど、黒くろい石いしが、どこにあるか、もとより容易よういに見当みあてることかできませんでした。彼かれはあちらへゆき、こちらへさまよつていますと、うすもやの中なかに、しよんぼりと立たっている人影ひとかげを見みいだしました。

「いまごろ、何人なんびとが立たっているのだらう。」と、怪あやしみながら、

よく見^みつめますと、それは、美^{うつく}しい、若^{わか}い女^{おんな}でありました。彼^{かれ}は、
好^{こう}奇^き心^{しん}から、つい、そのそばに近^{ちか}づいてみる気^きになりました。

「いまごろ、あなたは、そこになにをしていられますか？」と、
彼^{かれ}はたずねました。

美^{うつく}しい女^{おんな}は、ぱちりとした、すずしい目^めをこちらに向^むけまし
た。そして、彼^{かれ}を見^みていましたが、につこりと笑^{わら}つて、

「わたしは、かんざしの珠^{たま}をさがしています。もう幾^{いく}十^{ねん}年^{まえ}も前の
ことであります。わたしは、お嫁^{よめ}にゆく前^{まえ}に、ちようどこのあ
たりであつた窓^{まど}から、ある日^ひの夕^{ゆう}暮^ぐれ方^{がた}、かんざしの珠^{たま}をあやま
つて落^おとしますと、それがころげてどこへいったか見^みえなくなつ
たのです。それから、わたしは、いくら探^{さが}したかしれません。お

母さんからはしかられました。けれど、どうしても、なくした珠たまは見みつからなかったのです。わたしは、一いっしょう生しょうそのことを忘れわすれませんでした。今夜も、また、わたしは、その珠たまのことを思い出だして探さがしにきたのです。」と、その若い女わかおんなは、答こたえたのであります。

彼かれは、この話はなしをきくと、なんとなく体からだじゆうが、ぞつとしました。女おんなの姿すがたを見ると、長ながい黒くろい髪かみは結むすばずに、後うしろに垂たれていました。

若いわか、美うつくしい女おんなは、いっしょうけんめいに、足あしもとの草くさを分けわて、珠たまを探さがしていました。彼かれも、また草くさを分けわけて、なにかそのあたりに落おちていないかと、熱ねっしん心しんにたずねましたけれど、べつに

なにも見あたりませんでした。

「どんな色の珠でしたか？」

こういつて、彼は、顔を上げて、もう一度子細に若い女を見よ

うとしますと、どこにも女の影は、見えなかつたのです。

不思議なことがあれば、あるものだと思つて、しばらく彼は、

茫然として、たたずんでいました。

月は、西に傾きました。そして、思いなしか、東の空は白んで、

どこからか、暁を告げるに鶏の鳴く声が聞こえてきました。もや

は、いつしか晴れて、空は青みをまして頭の上に垂れかかつてい

ました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「中央公論」

1923（大正12）年12月

※表題は底本では、「山《やま》へ帰《かえ》りゆく父《ちち》」
となっています。

※初出時の表題は、「山へ帰り行く父」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山へ帰りゆく父

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>